

「復興とは何かを考える委員会」公開ワークショップ

最初に、中林一樹氏(首都大学東京・「復興とは何かを考える委員会」委員長)から、委員会の設立の経緯と昨年5月から月1回のペースで行われてきた委員会のこれまでの成果について報告がありました。その後、永松伸吾氏(人と防災未来センター・「復興とは何かを考える委員会」幹事)より、委員会と並行して行われてきたワーキンググループの作業のとして、「復興とは何かを考える委員会」におけるこれまでの議論と、主に復興制度研究所に所在する阪神大震災以降の復興に関する文献や、海外の災害研究に関する文献のそれぞれから、「復興を特徴づけるものは何か」、「復興の目標とは何か」などの復興を考える際に重要となる13の論点を抽出してきたことが紹介されました。

これらの議論を踏まえて、公開ワークショップでは、魚住由紀氏(フリーアナウンサー)、稲垣文彦氏(中越防災安全推進機構・復興デザインセンター)、矢守克也氏(京都大学)、加藤孝明氏(東京大学)の4名のパネリストから話題提供がなされました。魚住氏からは、震災障害者の事例が紹介されました。震災障害者は、震災後長い間その実態の把握さえ行われてきませんでした。報告では、「心のケアはあるけど、体のケアはない」「相談窓口がほしい」「人と防災未来センターでも自分たちのことを紹介してほしい」といった具体的な当事者の声を引きながら、復興を考える際に、震災当初はなかったが、復興の過程の中で新たに浮かび上がってくるような課題があるのではないかと問題提起がなされました。稲垣氏からは、復興を考える際に、その時代背景や地域の置かれている状況によって、捉え方が全く異なってくるのではないかという主張がなされました。そして、時代の転換点である「エポック」における復興を模索している中越では、創発型・プロセス重視型の取り組みが進んでいることや、支援者の役割とは新たな環境への適応過程のお手伝いをする事などが述べられ、「復興とは何らかによって失った、あるいは失いつつある人、地域等の誇り(存在)を取り戻していくプロセスではないか」と結ばれました。

矢守氏からは、復興とは何かを考える際の5つのキーワードの中から、「生きられる時間の多様性」と、「地域・文化・時代：我々は何を見ていないか」について報告がなされました。前者においては、震災から9年目に出された絵本について、その「9年目」とは亡くなられた娘さんがちょうど20歳を迎える年であったことなどの例が紹介され、被災者ひとりひとりが経験している時間は、決して年表やカレンダーに位置付けられるものではないことが述べられました。後者では、四川大地震の被災地の復興の様子と、日本の高度経済成長期の重なりを述べたうえで、外国の事例をみることで現在の日本の災害復興の中で「我々が何を見ていないのか」に気づくことが大切であると述べられました。加藤氏からは、「都市計画」「復興」「良い復興」「復興学会」のそれぞれについての問いかけがなされました。都市計画の目的とは、鳥瞰的な視点によって記述されるビジョンと、手段としての都市計画事業を用いて、豊かな環境の実現とそこでの幸せな生活の実現にあると紹介されました。そして、災害を人生あるいは都市の歴史の不連続点と捉え、復興を不連続点あるいは不連

続点より前の是正とみて、そこでは「急ぐ生活再建×時間のかかるまちづくり」や「個人の最適化×まちの最適化」といったバランスをいかにとるかということが問題になることが述べられ、最後に復興学会の役割とはこれらを踏まえて、平時の復興学をいかに確立できるかにあるのではないかとの問題提起がなされました。

これらの話題提供の後に、会場とのディスカッションが行われました。その中では、平常時の社会であっても存在する問題と復興における問題をどう捉えるか、多様な価値観が混在する復興においてバランスをとることは可能なのか、またひとりひとりに視点を向けることと、制度を構想することとの間の溝をどう埋めることができるのかなどが議論されました。最後に、室崎益輝氏から、現場の事実に基づいた議論を行うことと、都市復興と生活復興を対立させるのではなく、それらを共に追求していくこと、その中では物語が大切になっていくことが述べられ、ワークショップは盛況のうちに終わりました。

復興とは何かを考える委員会では、来年度も議論を継続し、2010年秋の日本災害復興学会で最終的な成果をまとめる予定です。